

中也賞に辺見庸さん 芥川賞作家、初の詩集「生首」で

2011年2月13日(日)掲載

山口市が現代詩人の登竜門として創設した「中原中也賞」の最終選考会が12日、同市湯田温泉の旅館・中村屋であり、第16回中也賞に芥川賞作家の辺見庸氏さん(66)＝埼玉県川越市＝の初めての詩集「生首」が選ばれた。同賞で、辺見氏は最高齢の受賞者。

今回の中也賞には全国から202詩集の応募・推薦があった。事前審査を経て7点が最終候補に残った。最終選考会は、中也が1933(昭和8)年に結婚披露宴を開いた同旅館の「葵の間」であった。北川透・梅光学院大学特任教授や現代詩作家の荒川洋治さんら6人が審査した。



第16回中原中也賞に選ばれた辺見庸氏の詩集「生首」

辺見さんの詩集は、2007年から書いた最新の46編で構成され、10年3月に毎日新聞社より発刊されている。選考で、死体の目を通して、混沌とする現代社会の奥深い問題、機能不全に陥っている内臓をわしづかみされている臨場感があるなどと評価され、満場一致で選ばれた。

選考委員代表の北川教授さんは「これまで作家、ジャーナリスト、エッセイストとして実績ある人が、詩の世界に新人として飛び込んできた意味を重く受け止めたい」と講評。荒川さんは「現実と向き合わない詩人がいるなかで、まるで黒船のようだ」、作家の高橋源一郎さんは「詩の外側からきた人ならではの挑発のようなメッセージ性を感じる」と述べた。

受賞に、辺見氏は「高名な夭折詩人の名前を冠した賞を、彼よりすでに2倍生きて、ここまで老いさらばえた私がちょうだいするのは、なにか道理がたたないような、筋が通らないような思いがいたします」とコメント。辺見氏は元共同通信記者。91年に「自動起床装置」で芥川賞を受賞している。

賞の贈呈式は中也の誕生日の4月29日、同市湯田温泉のホテル松政で行う。